

八重地ほ場整備事業

八重地の棚田は、近代化と減り続ける労働力の圧力により、その象徴的な輪郭を失う危機に瀕していました。現在では、これらの棚田は地域住民の保全活動の物語とほ場整備の先駆的なモデルの象徴となっています。

2002 年以前の八重地に見られたような小さく急勾配の棚田は、機械化農業には適していません。日本で使われている水田利用に特化したトラクターでさえ小さな棚田の中でスムーズに動かすことも、ひとつの棚田から別の棚田へ容易に昇降させることも困難でした。八重地では、棚田には歩道しかなかったので、小型のトラックでさえ入れませんでした。起伏のある地形は灌漑も困難なものにしました。そのうえ、この地域では現在住民の 70%を超える人々が 65 歳を上回っており、農業従事者数の減少に直面しています。

徳島県は八重地の水田を整備してより広い長方形のほ場にし、利用可能な機械の使用を促進する計画を 1998 年度に採択しました。しかし、この計画が伝統的な棚田の景観を台無しにしてしまうとの懸念が表明されました。そこで徳島県は、景観の専門家と協力し代替案を提案しました。2002 年十一月に完了したほ場整備事業は、可能な限り自然な土地の輪郭に沿った棚田を作ることによって、景観保全と営農管理のニーズを両立させていました。鋭角がないため、機械を容易に方向転換させることができます。同時に、小型トラックが必要な農業機械を運搬するのに十分なように道路が拡幅されました。開発されたこの画期的なシステムは、2002 年の第六回全国棚田サミットで発表されました。八重地の田畑は、このような再整備のされ方をした日本で初めての棚田の例です。そのため、景観保全および耕作効率のモデルとなっています。